

ナゴヤ子ども応援会議

平成27年11月10日 午後4時30分

名古屋市役所本庁舎2階 第1会議室

協議題

市立中学校男子生徒の自死について

出席者

河村 たかし 市長

梶田 知 委員長

福谷 朋子 委員

小栗 成男 委員

野田 敦敬 委員

船津 静代 委員

下田 一幸 教育長

〈事務局 鈴木教育委員会事務局総務部主幹〉

それでは、会議に入ります前に、この度亡くなられた生徒さんのご冥福をお祈りし、黙とうをささげたいと存じます。皆様、ご起立願います。

黙とう。

お直りください。ご着席ください。

続きまして、本日の会議に関しまして事務局の方からご報告とお願いがござ

います。

まず、本日の会議でございますが、協議題に関しまして、岩城副市長及び西淵教育次長並びに教育委員会事務局関係部長 2 名が会議要綱第 5 条に基づく関係者として同席をしております。

また、本日は、公開の会議としておりますので、ご発言にあたりましては、議題の性質上、個人情報の保護に特にご配慮をいただきますようお願い申し上げます。

最後に、本日の会議予定は、全体として 1 時間程度の終了ということを目途としております。よろしくお願い申し上げます。

それでは、市長、よろしくお願いいたします。

〈河村市長〉

はい、それでは皆さん、ご苦労様でございます。

本日はこれ、『ナゴヤ子ども応援会議』という、名前うってありますけど。これは昨年、法律ができて、『総合教育会議』ということで、市長が、いろいろ条文書いてありますけど、重要な事態が生じた時にはですね、教育委員にこういう風に協議を行うことができる。そういう規定に従いまして、お集まりいただいたということでございまして。その 2 項の中に生徒、生徒と書いてあったかどうか記憶がないんですけど、生命に危害が加わる場合にはですね、明文で示されとりまして、まさにこれを開かないかん、ということで。教育委員会というのは独立行政委員会という、一応、選挙もやれへんにも関わらずですね、別個のものになっておりまして、何か別の存在のようでございますが、それはあり得ないことでありまして。

やっぱり、この一人の中学生の子どもが、また、2 年前にもあり、また繰り返してしまった。それに対してですね、痛恨の極みなんだと、これは。それに対して一体教育委員会は何をしてきたんだと。ということでございまして。

その他、一応私も市民の皆さんに市長として選ばれておりますので、いろいろ申し上げたいことを申し上げます。そういうことでございます。

申し上げるだけじゃなくて、その対策なり、今回の。まあ一番中心は、また後で言いますが、やっぱりなぜ繰り返したのかと。ということは相当重いついてもらわなあかん。繰り返しますけど、教育委員会には本当に猛省を促します。何を一体やっと思ったんだと、2年。ということです。それが前提でございますが。

とりあえず、教育委員会から、概要と現状の報告ということで、お願いしたいと思います。

後、座って失礼します。

〈梶田委員長〉

教育委員長の梶田でございます。

今回の市立中学校男子生徒の自死についてご説明申し上げます。長くなりますので、座って失礼いたします。

資料1をご覧ください。当該生徒は、名古屋市立中学校1年男子生徒です。

経過についてですが、11月1日、日曜日、15時55分頃、当該生徒が地下鉄鶴舞線庄内通駅構内で電車にはねられ、病院に搬送されたものの、約1時間半後に死亡が確認されました。

その後、『ぼくは、学校や部活でいじめが多かった。部活では、よく弱いなとか言われていた。もう耐えられない。』などという内容が記述されたノートが、自宅本人の部屋の机の中から見つかりました。

当該生徒の普段の様子ですが、中学校に入学後、欠席もなく登校していました。また卓球部に所属、部活動には真面目に参加しており、休みがちでなく、欠席をするときにはきちんと連絡がありました。事案前日の10月31日、土曜日に確認されていることとして、朝8時5分に部活に出て来ましたが、この

日は練習試合の日で、当該生徒は参加予定ではなかったため、気づいた顧問が確認したところ「忘れていました」といって帰宅しています。

体型はぽっちゃり型で、運動、勉強も苦手で、とても優しい子でしたが、精神的に決して強い子ではありませんでした。

事案前の教育相談や学校独自のアンケート調査、これは2か月に1回実施されていましたが、これらの中では、当該生徒がいじめられているという事実は確認されておられません。当該アンケート調査では、学校生活の満足度を4段階で記入するようになっていますが、上から2番目の『3』に丸が付けられており、その理由としては、部活動や友人のことが挙げられていました。この他にも学校は、各種の調査により当該生徒を把握・理解しておりますが、その調査の方法や実際の対応も含めまして、後ほど資料3でご説明いたします。

学校の様子ですが、当該生徒以外の生徒に対するいじめについて認知しているものはありましたが、その中に重大事態として捉えているものはありませんでした。卓球部では9月に、生徒間でアドバイスを交わす際に言い方が少しきつかったために、言い争いになったというトラブルがあり、顧問が指導したことがありました。なお、この時のトラブルに当該生徒は関わっておりません。

事案後の対応状況ですが、現在、事実関係を調査中です。

まず、学校の教職員に対しては、1日、日曜日から4日、水曜日までに、教育委員会指導主事となごや子ども応援委員会スクールカウンセラーの複数体制を中心として、一通りの聞き取りを終えました。この中で、当該生徒へのいじめに関する内容は確認できませんでしたが、部活動の中で2年生が1年生に対し、強い言葉で指導したのを見た教員が「そういう言い方はしないように」と指導をしたことがあると証言しました。この1年生の中に当該生徒がいたかどうかは不明です。

また、2日、月曜日に、関係の深かった一部生徒〈卓球部の同学年生徒9名〉について、教務主任と子ども応援委員会スクールカウンセラーで聞き取り

を実施しました。この中で、当該生徒へのいじめに関する内容は確認できませんでしたが、うち1人は亡くなった生徒から10月中旬に「もうだめかもしれない」と聞いたことがあると証言しました。この生徒はその内容を「部活動のことではなく、人生のことや家のことなどいろいろ」と受け止めていたということです。

3日、火曜日には、教育委員会11月臨時会を開催し、それまでに分かっていた事実関係及び今後の対応について確認するとともに、引き続き調査と対応を指示しました。

4日、水曜日には、全校生徒に対する緊急アンケート調査を実施しました。結果の内容については、後ほど資料2で説明いたします。

5日、木曜日には、緊急アンケート調査の結果を遺族に、また記者会見及び教育委員会11月定例会で報告しました。教育委員会11月定例会では「名古屋市いじめ対策検討会議」に事実関係の調査等の諮問を決定しました。さらに、当該生徒が通っていた小学校の教職員5名に対する聞き取りを教育委員会指導主事が実施しましたが、当該生徒へのいじめに関する内容は確認できませんでした。

6日、金曜日からは、緊急アンケート調査の結果を踏まえて順次、教育委員会指導主事となごや子ども応援委員会スクールカウンセラーの複数体制で、関係生徒への詳細な聞き取りを行っております。聞き取りの対象は当該生徒と同じクラスの生徒28名、卓球部員67名の予定です。聞き取りの中で具体的な事案などが出てきた場合には、聞き取り対象を拡大する可能性もございます。聞き取りは、現在もなお続いておりますが、18日、水曜日の「名古屋市いじめ対策検討会議」までには、一通り聞き取りを終えたいと考えております。

今後でございますが、18日、水曜日に、外部有識者による「名古屋市いじめ対策検討会議」を開催し、調査を開始していただきます。平成25年7月に発生した名古屋市立中学校生徒の転落死に係る検証委員会で委員を委嘱した有

識者にも参画してもらう予定です。

また、当該校の子どもたちへの対応といたしまして、なごや子ども応援委員会、指導主事の常駐、及びスクールカウンセラーを手厚く配置し、生徒の不安解消や心のケアを実施してまいります。

さらに、なごや子ども応援委員会のスクールポリスやスクールガードリーダーによる巡回を強化して、登下校時の子どもたちの安全を確保するとともに、ネット上のひぼう・中傷などの書き込みに対応するため、ネットパトロールを強化してまいります。

続いて資料2をご覧ください。緊急アンケート調査の結果です。

11月4日、水曜日に、亡くなった生徒の通っていた中学校の全校生徒を対象に、無記名によるアンケート調査を実施したものです。『当該生徒がいじめられていたり、嫌なことをされたり言われたり、からかわれたりしたこと』について、見たり聞いたりしたことの有無を尋ねたところ、『直接現場を見た』という生徒が20人、『本人から聞いたり相談を受けたりしていた』という生徒が3人、『本人以外の人から聞いた』という生徒、これは友達からのメールやLINE等を含みますが、57人おりました。この結果は翌日、5日、木曜日に報道発表いたしております。このアンケート調査実施時には、アンケートに答えてもらった内容以外にも、子どもたちの心の状態に配慮しながら、さらに情報を得るため、教育委員会のメールアドレスを全生徒に周知しました。

次に、資料3「学校及び教育委員会の対応状況」をご覧ください

当該生徒について、どのように把握してきたか、またどのように対応してきたかについてご説明いたします。

なお、資料につきましては、当該生徒の個票、あるいは当該生徒本人が書きしるしたものもございますが、個人情報を含む内容であり、そのものを提示することは差し控えていただきたいという遺族のご希望もございますので、サンプルを用いてのご説明とさせていただきたいと存じます。

担任は、4月当初より、当該生徒について心も身体も強い子でなく、どちらかというといじめられやすい方だという印象をもっていたそうです。また、学習面でやや理解に時間がかかると感じていたそうです。

特に、いじめに関わる調査等について説明いたします。

別紙2をご覧ください。これは5月15日、金曜日に生徒が記載した教育相談アンケートの様式ですが、当該生徒のものには、いじめに関わった内容はありませんでした。

またその後、5月20日、水曜日に行われた当該生徒と担任による教育相談でも、いじめられているとの相談はありませんでした。

別紙4・5は、6月29日、月曜日と9月25日、金曜日に行った学校による独自のアンケート調査です。いずれも、当該生徒の用紙には、いじめに関する記述はありませんでした。

次に、当該生徒自身についての調査等について説明いたします。

別紙1をご覧ください。これは、4月8日、水曜日に行いました教研式サポート・学習スタイル診断のサンプルです。これによると、当該生徒の結果は、学習ペースが遅く、指導のポイントとして、小さな学習ステップを用意し、個別指導することが効果的であるなどの内容が記載されていました。

別紙3は、6月15日、月曜日に実施した、学校生活における生徒の意欲や満足感を測定するハイパーQUのサンプルです。当該生徒のハイパーQUの結果は、学級生活には満足できていないという結果がでていました。そのため担任は、当該生徒をよく観察し、声かけや関わりを多くもっていたそうです。また、ハイパーQUでは、教師との心理的な距離があまり近くないとの結果がでていたため、その後行われた保護者・当該生徒・担任による保護者会〈三者懇談〉において、担任が保護者にこの子にどう接すればよいかと相談していました。

また、当該中学校では、ハイパーQUを年間2回行っており、10月9日、

金曜日に行った2回目では、当該生徒は支援を必要とするグループに属していましたが、その結果が10月28日、水曜日に学校に届いたため、その後、情報を学校・学年で共有し、対応を検討していくところでした。

以上で説明を終わります。

〈河村市長〉

はい、ありがとうございます。法律によりまして、市長が議長をやることになっております。私が務めたいと思います。

まあ、まとめとして、個人的な名前が出てくるような状況の場合については、この会議は公開であるというルール「原則として」と書いておりますので、そのときにはまた、皆さんに招集をお願いして、その場合は仮に非公開になる場合もあるかもわかりませんが。

今日はとりあえず、途中で非公開にするのもおかしいと思いますので、公開のできる範囲でのことにしたいと思います。

私が3つほどまとめてきたんですけど、まず一つは、さきほども言いましたように、やはり一番大きいのは、2年前に南区でですね、私よく言いますけど、彼の遺書の中で「もし死後の世界があったら見えています。ありがとう。」と言って亡くなった中学生がいますね。それに対応して、ここにありますが、これですね、検証。後で、皆さん読まれたかと思いますが、そのときの検証報告書があります。詳細にレポートされております。そういうのを見て、私は私で見えていますと彼が言ってるんですから、天上で見えてくれとるんだなあ、ということですね。やっぱり子ども応援委員会、先生の分業ですね。先生「忙しい忙しい。」ってみんな言ってるじゃないですか。だから、教科を教える人と、もう一つは、日本で名古屋が初めてですが、子どもの悩みとか大きくなったら何になるんだとか、そういうようなことの子ども応援委員会を作ってきたと。私は私で全力投球した。これは誰に言われても全力投球しま

した。私は断言します、この場で。しかし、このように繰り返してしまったことは、教育委員会というのは、機能しとったのかと。この2年間。このレポートを受けてですよ。これ。このレポートを読みますと、やはり、学校の仕組みの中のいろんな提案書いてありますよ。そういうのやってきたのか。というのはやっぱり離れませんね、頭から。

特に執行部ですけど、専門の事務局をもっとの方です、問題は。教育委員にも2種類ありまして、こちらの方は、非常勤という対応になっとりますけど、常勤の事務局って何人おるんですか、一体。これ。教育委員会。何人おるんですか、これ。先生入れると1万人でしょ。これ事務局何人おるか知りませんが。それも仕事でおるじゃないですか。朝から晩まで。これ。言ってくださいよ。後で。堂々と全てのことをやってきたなら、それで結構です。誰に言われても支障ありません、言うんならそれで結構です。それちゃんと行ってください、まず。この2年間、どう思っているのか。ということです。

なぜこんなことになったのか。いや堂々と行ってくれりゃいいですよ。市民に対する謝罪する必要ないのか。と思いますよ、私は。ボランティアじゃないでしょ。ボランティアでも社会的責任は大きいですけど。まあ、これが一つ。

それから、現実的に、今回のことに至る事実がどうだったのかと。よく言いますが、私もずっと国会でこういう、いろんな追及をしてきましたけど、簡単にいいますが、まず真相を解明して、謝罪して、再生…再発防止をするという。簡単にいいますが、実は行政とかの世界は、大変に難しい。やっぱり隠されちゃうし。独占だから。で、3年経つと違う人になっちゃう、皆。民間の商売の場合は、全部が全部とは言いませんけど、たいていは違いますよ。一つのプロジェクト任されたら、そのことで必死になって、自分が責任取らないかんもの。だで非常に難しいです。

という中で、事実はどうであったかとか真相の解明は、きちっとしていただきたい。いじめの把握は実際されていたのかどうか、ということで。

教育委員会や、それから校長さん、それから教員の責任はないのかと、これは。ないんですかと思います。

それから、今後ですね、再発防止になりますけど、やっぱり真相解明をきちっとしないといかんし、2年間の、きちっとした自分らの、まあ本当はね、ちゃんと謝罪しないと。心からすいませんという気持ちがあると、そこからやっぱり何か生まれてくるんだね。どうしてもやらないかんですから、いろんな対策を。だけど、まあ、今んとこそういうニュアンスを僕はあんまり感じないけど。今後のいじめ防止策の強化と、子ども応援委員会の拡充が必要だと考えられますけど。

項目で言いますと、だいたいこの3つくらいでございます。

たまたま今日は、私のところに、市長ホットラインって言うのがありますけど。まったく別件なんだけど、ある区でですね、お母さんが「子どもが困っている。死にたいっていっとる」って、だからすぐ電話しろって架けさせましたけど、秘書に。

まあ、皆さんと後で意見交換の中で、やっぱ何かこう起きた時に、例えば病気なんかだったらすぐ救急車で運ぶと。そういうような、一番大事なのはそういうふうに思っとるか、というのですね、やっぱり。何かこう弱いんじゃないかと。今日の話でもそうだけど、学校にも言った、応援委員会にもつないだようですけど、後こっちの本部の指導主事にも電話したそうですけど、何かあーだこーだと時間かかっちゃってる。そこは詳細まだわからんですから、絶対的にどうこう言いませんですけども。

その中で、時間が非常にかかっているんだって言ってる不信感が多いと。また、やっぱりこう子どもさんに対する生命の危険も強いというのがあって、何か起きた時にすっと抱える、一旦考えるのはいいんだけど、今だったら子ども応援委員会、これ子ども応援委員会が忙しくて「やめてくれ。」と。もうこれ「対応できない。」と。そういうくらいまでしていいですよ。そういうような

気持ちが無いんじゃないかと。現場の中で。学校の中で。そう思いますよ、これ。違うんなら言ってくださいよ、堂々と。違いますよと。いいですよ、そう言っていただいて。だから、その先生の組織、まあ、私のところにも反対にこうなると、先生をかばってくださいというのがありますよ。そういう意見も。だけど先生かばったってしゃーないですよ、言っときますけど。子どもをかばわないと、これ、あくまで。ま、でもそういう視点で今のところは思っております。

それから、本当に思うのはね、先生側から提案が何にもないじゃないですか、これ。この2年間、これ。何でないんですか、これ。教育委員会がされてもいいけど。現実的なことを言いますと、常勤でおられる教育長の下におる。何人おられるか知りませんが。提案が全然ないんですよ。全然、ありません。これどういうことですかね。こんな大事な問題で。これどうなってるの。

それから、たまたま前のシドニー、これいってますけど、シドニー。高原さんもお見えになって、ちょっと、歩いとるとこがちょっとずれましたので、僕はちょうどおった時に日本語学科の高校の、中高一貫ですけども、ここらで言うところと高校生だと思ってるんですが、その子に「名古屋でこういう大変悲しいことが起こったんです。」と僕が話しかけて「このシドニーなんかではどうなの。」って聞いたんです。そしたら彼がどう言ったか言うと、「いや、結構昔はありました。」と。「だけど、見て見ぬふりをすることでいじめになる。それは、僕たち生徒にとっては、いじめることと同じぐらいいいかんことなんだっていうことをきちっと」ルール化したっていったかどうかちょっと覚えがありませんけど、「きちっとそういう風にしたんです。それから大幅に減りました。」ってことは言っていました。で、今、高原さんに、そこのところ連絡とってって言って、一朝一夕にころっと変わるものじゃないから、そこにいくまでのいろんな経過もいるだろうから、どうやってやったらええか、早速シドニーと連絡とってやりましょうって言って、ええことは吸収しましょうって言ってありま

す。

それもそうなんだけど、教員の提案っていうの何にもないんだけど、教育委員会から。特に常勤のところから。何なんですかね、これ一体。と、つくづく思います。

それからもう一つ言いますと、昨日のご家族のお見舞い行ったんですけど、この子ども応援委員会せっかく作ったんですけど、知られていない。残念ながら。知られていないです。昨日もちょっと話に出て、あんまりないようなことは言わんようにしてたんですけど、いわゆる今までのスクールカウンセラーの場合は、ちょっと話しありました。「まあ、みんな努力しているんだけど、やっぱりみんな非常勤ですから、なんといっても。普通は週1回来るだけでしょう、普通の場合は。だから非常に難しい。」と。でも「いやいや違うんだよ。」と。「ほんの隣の中学にあるのはね、常勤なんです。」と。知らないんですよ、これ。だから、今日も区政協力委員の大会で言いましたけど、やっぱりもっとみんなで、せっかくようけ市民の皆さんの血税を使ってるんだから、もう忙しくてしょうがない、対応できんというくらいまでせないかん。知らせないかんですよ。自分の孫なり、子どもなり、近所の子どもたちで、ちょっとおかしい時は、区役所いっても学校いってもいいんだけど、やっぱりそういう専門のあるっていうの分かってれば、自分でいってもらおうと、とりあえず。そういうチャンネルができたんだよ、と。日本で初めて、名古屋で。そういうこと僕は、必死になって取組んだ雰囲気を感じられない。悪いけど、教育委員会。感じられません。

それどころか、ちょっと聞いたお話ですが、もうちょっと詳しく聞かないかんけど、11校の方ですね、配置されるところ。ここはまあまだ問題意識があって、情報が入るようになってるけど、配置されてないところは、これは当初から問題になっていて、とにかく校長の方にしゃべってくださいって何遍も言ったんです。こういうのできたからって。いい意味でどんどんどんどん利用

してくださいって言ったんだけど、やっぱりそこの取組みが弱いということで、まあ例えてみれば、その子ども応援委員会の人たちが、自家用車通勤許されていないということで、当然その子ども応援委員会のメンバーは、そこだけじゃないからね、ブロック11ですからかなり広いですよ。そこに行くときに自転車か公共交通機関で行かないかん。行くだけでどれだけ時間かかるか、ということもあって、特に担当制がそんなに広い地域だったら、それはやっぱり自家用できてもらえばいいじゃないですか、自家用車で。そのかわり、どんどん周ってくださいよって話ですよ。

これは、僕ちょっと聞いたんで、違うことなら別ですけど。

でも、こんなことまでね、わかってないということ、本当いかんですよ。現場の人たち。問題意識があまりに希薄です。危機感。と思います。

それとまあ、僕は、今日西淵に言ったけど、とりあえず生徒さんから思ったけど、まあ、関係の担任、部活の方、それと学年ごとのかな、先生。自分でヒアリングさせてもらって、それとスクールカウンセラーもお見えになるようですので、そちらにもお願いして、特に先生関係のところは、自分でヒアリングを早速開始したいと。これをお願いしました。

子どもさんも、まあ私のこったで、いぎゃーと心を開いてくれる可能性がありますんで。だで、まあ、部活のメンバーとクラスのメンバーなんかはヒアリングしたい。ご父兄からいろいろ言われる可能性があるか分からんですけど、そこはちょっと丁寧にはしたいと思いますけど。

大体は、僕からは、以上でございますけど。委員長でございます。やっぱり怒ってもらわないかんです。怒ってもらわないかん、私は。やっぱり繰り返したということの重さ、これ。やっぱり本当の命がかかっているんで。助けられなくてごめんね、ということですけど。

2年で、僕ちょっと調べましたけど、全くないわけじゃないけど、他の都市で。いじめということがはっきりわかっている事例で、2年間に繰り返す事案

ないですよ。ありません。名古屋初めてです、2年は。もうちょっと長い時間で、ま、いじめでかどうかわからない、今回もいじめてわかっとなるかわからん言われりゃそりゃ別かわからんですけど、いうところは無いわけで。だから、僕は、これは相当な責任感を持ってやっていただきたいと。再発防止とかね。そのためには、責任とらせにゃいかんじゃないですか、これは。こういうふう
に思います。

いろいろ言いまして申し訳ないですけど。それだけ大変重要な事態が名古屋で生じたということで、そういうことをご対応お願いしたい。引き続きやっていきたいと思いますが。大体僕からは以上でございます。じゃ委員長から何か言われますか、常勤のほうからいわれますか。じゃ、まず委員長言ってください。

〈梶田委員長〉

はい、貴重なご意見、本当にありがとうございます。私としましても、本当に今回の中学1年生の自死ということについては、重く受けておりますし、市長おっしゃられる『子育てするなら名古屋』ということからすると本当に真逆の…

〈河村市長〉

それは、僕より前の人。

〈梶田委員長〉

あ、すいません。

〈河村市長〉

わしはあの『日本一子どもを応援するマチ ナゴヤ』を僕が言っとなる。

〈梶田委員長〉

そのことからすると、本当に真逆の。

今日、臨時委員会を開きまして、私も事務局の皆さんにお話をしたんですが、本当に市長おっしゃられるように、2年間の間に2人のお子さんを、死を選ばざるを得ない状況を作ってしまったということについては、大変、深く、強く、遺憾であるということ。そして今、名古屋市の、少なくとも教育委員会の、いじめに対する対応は、日本で最悪と。今おっしゃられたように、こんな例は無いとおっしゃられたとおり。本当にそれを重く受け止め、日本で最悪という自覚の元で、今後、本当に、今まで対応してきたことが、本当に有効になっていないという反省の元で、今後対応していかないといかん、ということをお申しましたし、私もその責任を、委員長として、重く受け止めております。本当に市長はじめ、ご遺族の方々に、本当におわび申し上げても申し上げきれない。私自身はそう思っておりますし、私もご遺族のところに弔問に参りまして、その意を伝えてまいりました。

本当にご迷惑をおかけしました。本当に申し訳ございませんでした。

〈下田教育長〉

事務局の代表として。

〈河村市長〉

はい、どうぞ。

〈下田教育長〉

教育長でございます。自分の任期の間に、2人のお子さんの命を失ったということは、何を言っても、これは努力が足りなかった。全力が足りなかった、

という風に反省しております。

ただ、2年前、あのことが起こって、大反省をして、せっかく応援委員会というのを作っていただいて、これはもう本当に必死でやってきました。そのことを作ること、それが学校に定着すること、学校の理解を得てそれが協働すること。そういうことについて、本当に必死でやってきたんですけども、本当に言い訳にしかありません。結果が全てですので、このことについては、本当に申し訳ないと思います。これは、市長ばかりじゃなくて、市民の皆さんに申し訳ないと思います。本当に申し訳ありませんでした。

〈河村市長〉

問題は、他の行政部門でもそうだけど、今下田さん教育長さんそう言われたけど、そういう気持ちで、下、言うと言語弊がありますが、現場と言ったらええのか、順番でいくとどういかに上がってくるか知らんけど、そここのところですね、そこまでちゃんと伝わるとるんだということ、そこでちゃんと改革意識というのか、こういうことというのは大変なことなんだということですね。まあ、普通で言ったら自分辞めないかんくらいのことなんだというぐらいのふうになんと下のほうにいとるかね、これ。問題は。

まあ下田さんそういうふうに言われるのはええけども。この2年間の中で。3年毎に大体担当替わるんでしょ、みんな。そこが一番…でもないけど、上の意識が重要ですけど、そりゃ教育長なり大事だけど、そこんとこどうなるとるんですかね、これ。そこの提案もないもん。

〈下田教育長〉

あの一、対策っていうものについては、教育委員会事務局の中で、対策をまとめておまして、その時には、各学校の提案を聞きながら、作っておりますので、市長には、直接、申し入れをされておられませんけども、私どもの事務局

の中に、それは反映して案を作ってきましたので、それが市長に伝わってないとすれば、私の責任でございます。

〈河村市長〉

いや、だから、どっかで、いじめなりそういうことで困っている子どもさんがいると、その情報なりが始め入ったときに、それは担任が持つのか、今だと担任なり部活の先生か分かんけど、この後どういうふうに誰んどこに持ってって、どういうステップで次どうやってやってくのかって、そういうことについてですよ。何か改善したの、これ。2年間かけて。2年前と。

〈下田教育長〉

いじめ対策のためのマニュアルという形で、でじごじがないように、全ての学校が同じ対応がとれるようにマニュアルを作りました。それを徹底しているという状況です。

〈河村市長〉

それは2年前なかったんですか。

〈下田教育長〉

ありませんでした。

〈河村市長〉

なかったと。

〈下田教育長〉

はい。

〈河村市長〉

2年前に作ったと。そのとおりやってどうなったのか、よう分からんけど。今回まだ分かりませんが、推測で言っちゃいかんけども、今日も出てるように20人のね、お子さんがいじめの場所を見てるということだけども、それだけ学校側は知らない。普通は通じませんよ。まあ、分からないですけど、これまだ。えー加減なことを言っちゃいけないけども。普通はそんなこと通じませんよ、本当に分かっとらんだったら、それって。先生も分かっとらん。誰か知っとったと僕は思います、何らかの問題を。そのときにはどういうふうに上がってきたプロセスに対する、もっとどういうのかなあ、他ではなごやカップという改善をやっとるけど、あれはあれでやっとりますけども、もっとでかい問題ですから。もっといろんな、すべからくあって良いんじゃないかと。それと子ども応援委員会が隣にあったんですから。そこへどういうプロセスでいくのか。その辺はどうなっとるんですか、何か情報があったときに子ども応援委員会に伝達するなり頼むのは、どういうふうで行くんですか。

〈事務局 樋口教育委員会事務局子ども応援室長〉

設置校以外の学校ということになりますと、その学校の先生からの連絡を受ける、あるいは保護者さんからでも結構ですし、それからまた教育委員会の方に挙がってきた案件の中から、これはやっぱり応援委員会でやるべきではないかというようなことでも始めることもございます。基本的にはその設置校以外のところでは、いかに気付いていただいたことに対して、我々専門家グループがいかに一緒に対応できるかそういうことでやっております。

〈河村市長〉

だから、誰か、校長か誰かが言わないかんわけでしょう。おたくの事務局の

方へ行くわけだ、要するに。

〈事務局 樋口室長〉

いえ、応援委員会の直接のグループでも結構です。そちらで受けます。

〈河村市長〉

ああ、直接でもいい。

〈下田教育長〉

ただ、設置校は、今の組織的には応援委員会は独立しておりますので、第三者の目が、市長が最初からおっしゃってみえたように、第三者の目が設置校については入るとい状況になっております。ただ、設置校以外については、今申しあげましたように、まだ途中ですので、完成形ではないですので、少し過渡期的な状況はあります。

〈河村市長〉

そこが何遍も、始めから言われとったけどね、当然。だで一遍わしもずっと校長のところ回っていこうかくらい言った覚えがあります。こういった新しい仕組みだから分らんので、はよ連絡してちょーよということ。

現実的にどうなっとるの。まず、最初に先生が今回、話はまたこれからとしましても、どっかで何か気がついたときは、そのあとは学年主任かね。

〈事務局 西淵教育次長〉

学年主任に関しまして、まず、先生が直接いろんなことを把握する、部活であつても担任であつても色んな場合があるんですけども、把握したというような場合には、まず学年間で話しあうということが具体的に行われておりま

す。その学年間をまとめているのは学年主任ですので、そこが教務主任なり、教頭なりというふうなルートを通して、教頭が一応窓口となって応援委員会のほうにつながるといふふうになっておりますので、学校の教員が把握した問題については、応援委員会設置校ではなくても、今のようなルートで応援委員会に、実際この学校、このことが起こった学校のこの事案は、不幸なことに応援委員会につながりませんでしたけれども、他の事案については、かなりつながって応援委員会が対応しているものもございますので、それはそういうふうな。もう一つは、直接保護者の方が応援委員会に話をされる、これも可能にしてございますので、そういうふうにあがってきて対応しておる事例もございません。

〈河村市長〉

担任がね。この場合のね、まあ知らないって言ってるけど、私は本当にそんなことあり得るのかなと、これ。20人、まだ会ってないからね、まだ分かりませんが、仮に、若干一般論的にしまして、担任が何か聞いてきたと、この子大丈夫かなと思ったときに、まずその日のうちに、学年。

〈事務局 西淵教育次長〉

はい。もう気付いたら、すぐ学年で話し合うっていうのは、通常出来る状態になっておりますし、こういう、いろんな調査で気付いたような場合もございますので、そういうのは、学年間でさきほど教育長がお話しましたマニュアルの中で、学年間で学年会というものを開いて共有するような仕組みになっております。

〈河村市長〉

だけでも、わしが思うのはよ、子どもさんの命でしょう。だで、やっぱり何

が起るかわからんですよ、やっぱり。とっさの判断をしちゃうこともあるもんで。だで、なんか順番にそんなことやって会議をしてですね、やるような問題、会議したほうがええけど、それとは別個に、体だったら救急車を呼ぶような対応ですわね、結局。そういうのが必要なんじゃないの、やっぱり。

〈事務局 西淵教育次長〉

もちろん緊急の場合に、例えば今のようなホットメールが入る、自殺するというようなホットメールが入る、あるいは電話も対応しとるんですけども、そういうものが入った場合には、緊急にそれは直接、校長に入って、すぐ教育委員会に入るといふ対応をしているところです。

〈河村市長〉

そうだけど、今日のはちょっとまだね、細かくはちょっと見てないから分からなん、今日電話しましたけども、子どもが死にたいといっとるというようなことで、あんたとこの教務主任かな、そういった連絡がはいっとるらしいですよ。両方の意見があるから何とかなるって相談させてくれとかなんかいつって時間がかかるとるんで、非常にそういう面でお母さんも不安だというのは、これはホットラインでありましたけども、どうもだから、その緊急性に対する意識がちょっと弱いんじゃないかな、やっぱりこれ、みなさんの中で。というふうに僕は、今、思っておるんですね。今日のはもうちょっと調べないかんのであれですけども、現実の話として今日のがあります。

根本はやっぱり、子どもさんのことだもんで、やっぱり今言いましたように僕らと違ってとっさのことがあり得るじゃないですか。大人でもありますよね、これ。だからやっぱり何かの気付きがあったら、それはそれでもう直ちに応援委員会に連絡して、すぐ少なくとも自家用車で行くところへ、これね。学校から。このようなことは当たり前のように必要なことじゃないかと思いき

ど、わし。ここらへんが、何か今までの会議の中と同じのようなふうにつえとったんじゃないの、これ。

〈事務局 西淵教育次長〉

緊急の場合は、そういうふうではないです。

〈河村市長〉

そうきゃ、おい。

〈事務局 西淵教育次長〉

24時間、教育センターのほうでも自殺相談等の窓口ももっておりますし、他のチャイルドラインとかいろんなこと連携しておりますので、そういうのが入れば、すぐ、やることになっておりますんで。それはそういうことはない。

〈河村市長〉

今のところは、そうは今回見とつてもね、思いませんけどね。

〈下田教育長〉

今回は20人の子どもが見たと言っている中で、教師軍団が気付いてないもんですから、そこはセンサーが弱いということは間違いない。

〈河村市長〉

でしょう。

〈下田教育長〉

ただ、緊急の場合は、今、次長が申し上げたとおりですけど、児童相談所の時もそうですけれど、やっぱり組織的に動かないと、子どもの命は守れないと思っておりますので、ここはきちんとやっていくべきだと、緊急は別です。

〈河村市長〉

緊急言ったって、そんなもん、「私は今から死にます。」というようなものを緊急というだけでは、そんなあり得んです、そんな話は。ほとんどないですよ、そんなん。いやいいけど、なかなかよう、えらいさんの顔ばかりしか見えせんもんだで。他の分野でもそうだけど、課長さんだとか、ま、よう分かりませんよ。校長さんなのか、その下なのか、そういうところにやっぱり、物事を、緊急性を重要に感じて、いま僕が言ったような、例えば二つの道をね、会議が要らんとは言いませんよ。組織的な対応も必要ですから。だけど、やっぱりまず第一報は、せっかく作ったんだで、市民の税金を使って、応援委員会を。そこに何でもいいで、言って、まず車で来てもらおうと。ソーシャルワーカーにも来てもらって自宅へも行ってもらおうと。まずやってもらおうという、そういう提案って上がってこんのかね、これ。言いたいの、わし。

そこですわ、言いたいの。問題は。僕みたいなやつでもこれ今考えるじゃないですか。二つそういう道を作ったらどうかとか。そのへんですわ。そういうものを直さんと、また同じことを繰り返さすよ、ということです。組織的にたるんだところがあるんですよ。それで、何か改善、改善という言葉は、機械みたいだでいかんけど、直そうということを提案するのをしにくくしているような先生の機構があるんじゃないの、中にこれ。教育委員会の中に。3年間経ってまた違うところいくで、その間大人しくしとればいいわと、余分な新しいこと言ってそんなことやらんほうがええ、というのはあれへんかな。そういうふうを感じるけど、小栗さんに、じゃあ。

〈小栗委員〉

はい。まず冒頭、市長のお話を本当に重く受け止めまして、大変申し訳ない気持ちでいます。今日、さきほど緊急会議でお話したことと、冒頭市長がお話されたことを私なりに組み入れながら考えていきますと、まずもって、子ども応援委員会、これは、市長いろいろおっしゃられましたけども、私は大変良い制度だと思ってます。それで、まだまだ不十分ではありますけども、これによって救われているお子さんもいらっしゃいますよね。私はこの制度はしっかりこれから、早くスピードを持って展開をし、拡充していくべきだなというふうに思っているんで、大変私は良い制度を作っていただいたし、これをもっともっと充実、早くさせることが大事というふうに感じております。

それと、市長のお話の危機感という点で申し上げますと、私は民間の企業を経営しておりますけれども、今日申し上げたのは、アンケートをしたりですね、ハイパーQUのアンケート結果もやったんですけども、今回6月に、課題の残る生徒であったと、要支援、不満足であったということがありまして、2回目の調査をした結果が10月の28日に学校に届く、もしくは29日にその学校の先生が見れるというふうに伺っております。さきほどスピード感という話しで申し上げますと、今回の場合、アンケートや聞き取りでその子どものいじめということとは把握できなかった。しかし、そのものをもし、届いて何よりも最優先して見ていけば、ひょっとすると何か手が打てたのではないかという、そのスピード感というものを優先して、来た時点ですぐに封を開けてその結果を見る、その生徒入れて29名と聞いておりますけども、29名全員を見るには時間がかかると思うんですが、ただ、その中で良くなったり悪くなったりする生徒はありますが、まず、その1項目を見るにはそんなに時間がかからないと思うんです。その子が緊急を要するとか。で、やはりそういう学校の先生に、年1回のところもあれば、年2回もあるんですけども、やはり回数を多くやったほうがいい、ハイパーQUというのは1回ではなくて2回やった方が

いいんだと、と同時に、その結果が出る日にちを学校がきっちり把握をして、何日ぐらいに届くか、約2週間と聞きました、ただ、その2週間程度よりもだいたい何日になるのか、1日2日の前後あるかもしれない、だいたい何日に届きます、と。それがもし休みの前であれば前通しにするとか、そういった努力をして、今回、もしそれを見て何か手が打てたかもしれない。したがって緊急とかスピード感ということであれば、まずそういったものを何よりも優先して、やっぱり先生が見て手を打っていく、ということをしつかりお願いしたい、というふうに申し上げました。

それから、先ほどおっしゃられた、見て見ぬふりをするのは非常に良くないというお話がありまして、どうこれを解決していかなくてはいけないかなということが。もちろん課題になってますけども、非常に勇気がいることだと思いますし、親御さんにとっては、逆にそれを言うてしまうとご存知の通り、自分の子どもが、というような心配になってきますので、まだまだここではすぐにお答えはできないんですけれども、見て見ぬふりをしないというような、どうすればできるかということ、当然やっぱりこれからもっともっと真剣に考えていくべきだなと思います。そういった勇気のある子ども達を教育すべきだなと、ではどうやったらその勇気ができるかということも課題かな、というふうに思っておりました。色々お話を頂きまして、本当に反省しきりでありますけれども、しっかり我々も真摯に受け止めていきたいと思っております。

〈事務局 西淵教育次長〉

非常に反省のことは、そうなんですけれども、さきほど市長が言われた、全く提案がない、ということなんですけれども、2年前、前回ありまして、このお子さんもそうなんですけれども、非常に友達、仲間作りが、友達が少ないことをお母さんも言うてみえますし、そういうことも学校の担任の先生もおっしゃっておりますので、そういう色んな輪を広げるためにやっていかないと、い

じめいじめということだけでものすごく子どもを見るっていうだけでは、やはり教育活動っていうのは日頃なりたないと思っております。

それで学校の先生方から提案がありまして、仲間作り推進活動、これは新聞にも色々取り上げられとりますけれども、みんなで、これオーストラリアの方とも少し関係すると思うんですけど、みんなで色んなものを一つのことを成し遂げるために学校の仲間を集ってやっていくような対策を、新たに学校の先生から言っていたいで、市長さんにも予算化していただいております、仲間作り推進活動ということ、全校ではないんですけども、少しずつ始めております。これは本当に現場からの提案があつてなされていることですので、全くないということではございませんので、それだけ申し上げておきたいと。

〈河村市長〉

まあ、でもなかなか、その感じよね、これ。感じないもん。残念ながら。なんか湧き上がるような、先生の中でね。こういうふうにやってったら、どうやろうかというのを。

〈事務局 西淵教育次長〉

それは、我々が市長さんに、十分お話できていないということがあつて、反省をするところだと思います。

〈河村市長〉

反省とか、そういうのええんだけど、本当に、どうも僕は、まあ、繰り替えしますけど、ぱっと見た感じでは、何かぱつとあつたときに、すぐ、ここでいや応援委員会ね、今だったら、ぱつと連絡するんじゃないくて、とりあえずちよつと抱えてしまうというですね、抱えるほうもいいですよ、そりゃ議論も。もう一個はこういう悲劇がぱつと起きる可能性あるから、もう一個のルートをち

ちゃんと自分で果たすと、校長がどう言おうが私連絡しますわ、ぐらいな話ですわ、はっきり言って。勝手にやるなって何言っとるんですかかって、これは。言うくらいのこととは言えんのかね、先生っちゅうのは。どうなっとるか知らんですけど。そんなふうに、なんかこの感じますね。先生がマニュアルで決めとったプロセスばっか追っておってですね。もうひとつそこに、違うというのではないんだけど、それはそれでいいんだけど、もう一つ自主性を持って、万が一のことがあったら、私先生辞めないかんのですよぐらいのですね、これ。危機感をもって自分で連絡をするというぐらいのことがあってもいいと思いますよ、わし。柔軟性というか責任感というか、どういうのかわからんけどね。まあ、人間のことだで、わしもこんなかつこいいこと言って、わしが失敗こいたりろくでもないことあるかもわからんけど、少なくとも自分が辞める気持ちは持ってますよ、なんかあったときは。組織にいて、何なんだということが、それはそれでいいけども、これ。そこは。

ということで、他には何かありますか。

〈福谷委員〉

よろしいでしょうか。

いま市長がおっしゃいましたように、子ども応援委員会にどうつないでいくかということも大変な課題だと思うんですけども、今回また調査をまたなければいけないと思うんですけども、気付かない、ということ自体の意識をどう変えていくか。さっき市長がおっしゃった危機感というところにも関わってくると思うんですけども。そこについて、学校現場の意識を根本的に変えていく必要性をすごく痛感しております、先ほど小栗委員もおっしゃいましたけれども、見て見ぬふりをするのがいじめと同じなんだよということはどういう形で生徒に実感として持ってもらおうかということ非常に大事だなと思っております。今回、事件が発生しまして、前回の検証報告書、今、市長のほう

にもお手元にもあると思うんですけれども、改めて見直しまして、そのいじめというものが何かということについて、文科省等も定義しておりますが、こちらの検証報告書には、軽い気持ちで面白がってやったとしても、されている子どもが苦痛であればそれはいじめなんだということを、皆が徹底して知る必要もあると。「いじる」という言葉が最近ありますけれども、違いを見てもらえればいじられキャラとかそういう話ではなくて、やられているほうが苦痛であることがいじめだということを皆がわかるようになるだろうということも指摘されておりますし、先ほど市長がおっしゃった、見て見ぬふりが同じということについても、いじめというのが、4層構造、いじめている子、いじめられている子、観衆、傍観者の4層構造によって作られているものだと指摘もされておりますので、このあたりをですね、その生徒たちにも認識してもらおうとともに、学校現場のなかで加害者と被害者の問題ではなくて、4層構造にあるということについての問題意識と危機感というものを個々の先生方に持っていただく必要性がとてもあるのではないかと考えております。先ほど教育長の話にあったように、20人の生徒さんが目撃されているにも関わらず、学校現場がそれを知らなかったという状況であるということは、大変見逃せない重大なことだと思っておりますので、そのあたりについて、どのような形で、意識を根本的に変化、変換していくべきか、ということについて、今後我々の検討課題かなと考えております。

〈河村市長〉

初めの気付くところだけど、一般的に、よくまあ、こうやってありますと、テレビなんかワイドショーなんていって、そこで出てくる人が、やっぱ先生は忙しいとかね。それから、いじめに気付く言いますけど、実はそう簡単じゃないんだと。それは難しいという話が出るんで。わし、先生たちに言いたいのは、そうだったら、はっきり言ってきたらどうなのと。忙しいから難しいと

か。大変、実は難しいんですよ、言って。そんな簡単に気づくことは。言ってきたらどう。だから、もっと専門職増やしてくださいとか。それもあれへんじゃないですか、先生のほうからの提言は。あれへんもん、全然。私はね、そう簡単に気付けれんのだと思いますよ。やっぱり気付けるのもあるけど、なかなか難しいと思いますよ、僕は。で、そんなふうに本人が言わないかんじゃないですか、先生、責任感持っとったら。僕ではもうできんならできんと、私たちでは。言ってくれたらどうですか。そうになったらこないだも、私ロサンゼルスのスクールカウンセラー来たときに言いましたけど、こういうことにですね、お金を惜しむことはあり得ないって、これは。これは、あり得ないんですよ。財政がどう言おうと関係ないですよ、それは。何遍も言っとるじゃないですか。もっと予算要求しや一言って。でも言えせんもん、これ。全然。これせんじゃないですか。「私は忙しくて難しいんです」って。「市長なんだかんだいってるけど、そんな簡単じゃありません」って。「やってくださいよ」ぐらいのこと。言やいいじゃないですか。

やっぱり私は、単純にいうと、そういう問題、教師の中の。何か新しい提案をしていくと出世できんようなね。そんな何かあほらしいような雰囲気があるのではないかと。3年毎に替わっていくから、皆。何か事故が起きたって、その間だけ何とかいきやいいわって、子どもの命に対する責任感の希薄さ。これ、この辺がやっぱりあるということと、やっぱり専門職増やして欲しいと、そう簡単じゃないんだと、そういうことをこう絞り出すように先生の中から声が出てこないかんですよ。これ、本当に。私はそう思いますよ。そう滅茶苦茶悪口言っとるわけじゃないですよ、そりゃ。そう簡単じゃないいうのも分かるし、忙しいということも分かる…分からんでもない。そういうことだと思うけど。これやれせんもん。僕だけ自分のことばかり言ったらいかんですけど。後、野田先生どうですか。

〈野田委員〉

5月ですか、市長とやりとりして、子ども応援大綱、この2つ目に『「なごやっ子」の育ちと針路を応援する仕組みを確立!』ということで、これは全国に先駆けて、文科省が「チーム学校」ということを先駆けて進んでいるし、その中で後半に、『大きくなったら何になるの?』というのがありますよね。ここを私はすごく気に入っていて、この後、船津委員さんに就任していただいて、これからだと思います。

それから、ちょうど私も本当に反省するのは、前の事件が起こって3ヵ月後に私が委員長になりまして、その後応援委員会が立ち上がって、この制度に向けて、事務局と一体になって進めてまいりまして。ちょっと時間かかりまして、2月くらいに初めて応募開始して、面接をして、去年の5月から立ち上がりました。

その時には、すぐに視察をとというのも何でしたので、1年くらい前に、委員長が私から服部委員長になってから、2つくらい現場視察に行きました。そこで、非常に学校と一体になってやっている部分もあれば、やっぱり少し問題もある部分もありました。その問題のある部分は、我々も指摘させていただいたり、それから、やはり、急な応募だったものですから、お一人お一人を見ていくと質的に問題のある方もありました。それで今年はですね、我々も面接官になって、子ども応援委員会のスタッフの面接をしました。やはり全国から注目されていて、応募がありまして、あーこの人はぜひなって欲しいなって、遠くからですね、九州からでしたかね、来ていただいたいてっていう方もありましたし。注目されているのは事実だと思います。

ただ、まだ正味1年半、ですか、その中に課題もあるし、これからですね、市長が言われるように、これをどれだけ育てていくかっていうのが我々の使命だな、というふうに思っております。

もう一つ、確かにいじめを、勇気を持って言うというのは非常に大事だと思

うんですけど、非常に難しいな、と思ったのは、「見た」という20人ですね。その事件があってから、アンケートとってるんですね。だから、その時には、じゃれあつとったのかなっていう雰囲気の人いるかもしれない。終わってから、やっぱりあれ、いじめだったんだな。いじめってのは、本人もそうですし、周りもですね、非常に自分の感覚で見るわけですね。たぶん20人が全員そのときにいじめだと思っただのかというと、少し考えないといかん。で、この事件があってからこういうアンケートをして、「あーあの時のああやってやられていたの、あれ「いじめ」だったんだな」、で「見ました」という子もいるのかなと。そうすると、まるまる20人っていうふうには、なかなか見れないかなと。これは非常に難しい問題ですけども、その辺をもう一回。まあ起こってから聞いているもんですからね、そうなるんですけども。

最初にも言いましたが、『大きくなったら何になるの?』といった、自己肯定感、自己有用感を育てるような教育も今後していく必要があるなど。そうするとやっぱり、そういういじめを見てもですね、勇気をもって言えるような子が出てくるんじゃないかなと。そういうふうに感じています。

〈河村市長〉

じゃ、船津さんも。せっかくですから。

〈船津委員〉

はい。私、今回委員になったばかりで、すごくわからないこともあって、検証報告書をもう一回きっちり読ませていただいたんですけど、その中に、今後の対策の中にですね、今市長がおっしゃったことが全部入っていて、例えば、『本校いじめ防止基本方針策定に当たっての要望』の中に、『教職員が本事案について主体的に考え・学ぶこと』っていうのが、検証委員会が判断するのを待たずに当事者として考えましょうというのが入っていますし、『生徒とともに

に考え・学ぶこと』っていうことも入っていますし、それから、そういうものの防止の基本方針の策定には、生徒が参加することが大事であるっていうのも入っている。実際、たぶん、分からなくて言うんですけど、その後これは、教育の現場ではそれなりに考えられてきていると思うんですね。ただ、それが実際どこまでされていたかっていうことが、たぶん市長にも他の市民の方にもよく見えてないっていうのは、取組まれていることを発信されていないもったいなさもあるでしょうし、それが足りていないところもあると思うので、今市長からお話があったことは、市民の皆さん方が教育委員会の取り組みについて、なかなかご理解いただけない、これを発信する側の問題があるなというふうには感じていますので、やれていること、やれていないこと、これからやろうとしていることについては、この機会に、一人の尊い命亡くなられましたので、これを機会に、それはちゃんと発信していく必要が、責任があるなというふうには痛感しています。

もう一つは、今、野田先生おっしゃったとおりですね、いじめについての『「学校いじめ対応のポイント」における取扱い』っていうのも、きっちりこの中に入っていて、その中には、『児童生徒が円滑に他者とコミュニケーションを図る能力を育てる』ということも入って、それは現場でもちゃんとなされてきているので、今日あるなと思うんですけども、それが実際に薄れていることもあるでしょうし、具体的にどう取組まれているかっていうことも実際見えてこない部分がありますし、この中にあるような役割、子どもが自分の役割を持つことで自己有用感であったりとか、そういうものが育つんだということもある。今日も私、この亡くなった生徒さんは、クラスの中で何委員をやってたんですかってお聴きしたんですけども、委員一つにしてみてもそれが役割であって、例えばそれが一人でやっているんじゃなくて他のクラスの役割の人たちと、その役割について語る機会でもあったら、何がしか支えになることがあったかもしれないなと思うこともありますんで、学校の中での本人の役

割を持って、それが大人になるときに何になっていくのかって、きっかけになるような、機会は必ず必要かなって思います。

私、素人ではいったばかりでなかなかまとまった話できないんですけども、この検証報告書の中には大事なことがたくさん入っているっていうのをもう一回皆で読み直す必要があると感じます。

〈河村市長〉

それじゃ、はい、どうぞ。

〈梶田委員長〉

この検証委員会の報告を、私は先生方が本当に2年前、この報告書を真剣に読んでいただいたんだらうか、ということについては、正直言って甚だ疑問に感じます。あの尊い命が失われた2年前、本当に先生方がちゃんと受け止めて、検証をしていたら、もしかしたらもっと生徒に対する接し方は、変わったのかもしれない。その時この検証報告書の中に、そのときのことを『本生徒が、クラスの他の生徒からされていたことについて教師は、誰もが「悪ふざけ」「ふざけ合い」「遊び」と見て、「いじめ」と認識する教師はいなかった』。今回と全く一緒だなあというふうに感じております。この報告書には、『「いじめ」問題に十分取組んでこなかったことは、教師の「いじめ」理解の不十分さにつながっている』と。そのいじめ理解のことは、本当に詳しく書かれておりますが、そのことが、私は、結局2年前の生徒の、天国で見守ってくれている生徒さんに本当に応えていなかったと、私自身は。本日の教育委員会の臨時会の調査報告、現時点までの調査報告では、その部分のギャップというものを強く感じてなりません。まだまだこれから検証が進んでいくと思いますが、この検証報告と併せて検証していくことが必要だろうなど。本当にこの検証報告が、学校の先生の中でどう位置付けられているのか、ということは本当

に重要な問題だし、この2年前の検証報告が現場でいきていなければ、今回のこの事件も、同じことを繰り返すことになってしまう、そう思っておりますので、そのへんを重く受け止めて、今後事務局と、我々常勤ではありませんが、協力し合いながら、時には厳しくしていきたいというふうに考えております。本当に重ねてではあります、ご遺族の方々、市民の方々、市長の思いを考えますと、本当に委員長として申し訳なく、おわびする次第でございます。どうも申し訳ございませんでした。

〈河村市長〉

他に、意見は。まあ時間もきたいということで、またですけど、僕から。まあ事案調査はきちっとやってください、ということですけど。結局やっぱり教育委員会も1万人おって長いことやっとならなわけでしょ。競争相手はありませんから。独占体ですので。そんなかにたぶん、気付いて見える問題点は他所に誰かあると思いますから。もし見とったら、改革派がもしおったらですよ。まあどうやってやったらええか分からんけど、まあ皆さん、本当は教育委員さん、そういうとこゲットして。ないし僕のとこへ言ってきてもらって、実はこういうことなんだと、これは。こんだけ言っても聞いてくれへんがやと。余分なこと言うやつは出世できんのだとか、というような話ですわ。卑近な話は。そういうとこにやっぱりメスを入れてもらうというのが、教育委員の本来の、本来の姿だよね、これは。だから、常勤の皆さんにおもねんようにしてちょうよ。おもねったってしょうがないですよ。せつかく権限を持って、市民から付託されてるんで。組織の機能不全みたいなのは、やっぱりよ、どっかあると思うで、わし。本当にこれは。何か新しい提案を、何かこう、ちょっとこんなこと言わんでいいがねっていうような雰囲気ですわ。そういうとこは是非、皆さんで発掘してもらって。

まあ『日本一子どもを応援するナゴヤ』っていう看板を絶対下ろさんと。こ

うということがあったけど。そういう決意の下で進んでいただきたいと思います。

そんなことで。えらそうなこと言いましたけど。まあ67になりましたんで。子どもが皆立派になってもらうようにね。そういうナゴヤにしていきたいと思います。まあそんなことで、今日はどうもありがとうございました。

〈終

了〉